『正法眼蔵』における頭陀説再考

明治大学文学部教授
東京大学文学部講師
阿部慈園

1 はじめに

現在、「頭陀の研究」というテーマで論文をまとめつつある。その中心は、原始仏教・パーリ仏教における頭陀の研究であるが、原始仏教とは姉妹宗教といわれるジャイナ教の「ドゥヤ」(dhuya) との比較、また大乗仏教および中国仏教・日本仏教が言及する頭陀説にも触れたいと思う。中国では、『梁高僧伝』『続高僧伝』『宋高僧』を読むと習禅者の多くが頭陀を実践したことがうかがわれる。わが国では、頭陀者として筆者は、道元禅師（以下禅師）と一遍上人（上人）を挙げたい。捨聖一遍の遊行は、頭陀行にほかならない。上人の頭陀行については稿をあらためることとし、ここでは禅師の頭陀観をその著『正法眼蔵』を手がかりにして考察することにしよう。「禅師が採用した頭陀支」「糞掃衣と袈裟崇拝」「常坐不臥と只管打坐」がその主な内容である。その考察に先立って、「頭陀とは何か」についておさえておくことにしよう。なお、

『正法眼蔵』の引用は水野弥穂子校注の岩波文庫本である。

2 頭陀とは何か？

「頭陀」は、パーリ語のドゥタ、ドゥータ(dhuta,dhūta)、サンスクリット語のドゥータ(dhūta)の音写語である。玄奘はこれを「杜多」と音写した。以後、頭陀は旧訳、杜多は新訳とされる。

さて、dhuta（dhūta）という語は、「洗い流す」「除き去る」を意味する動詞語根ドゥー(dhū)から作られた過去分詞形である。ジャイナ教のdhuyaもその語根はdhūであり、仏教のdhutaに対応する。現代インド語のひとつであるマラーティー語でも、汚れた衣類を「洗濯する」というときに、ドゥーネー（dhūne）の語が用いられる。

仏典ではこの語に「除遣（じょけん）」とか「抖擻（とそう）」という意訳を与えている。「心に附着した煩悩や悪を洗い流すこと」また「煩悩や悪を除去して心が浄化された状態」を意味する。衣類についた汗や垢を洗濯して除去するように、心にしみついた煩悩（随煩悩も）や悪を除き去るのである。ゆえに、頭陀とは「心の洗濯」であり、その結果「心の浄化に導くこと、またもの」ということができよう。パーリ仏教では、頭陀の語に次の二義（人と法）を与えている。

① 煩悩を除遣してしまった人

② 煩悩を除遣するための実践徳目

①は、ときとしてブッダを指す。②は、パーリ仏典では「頭陀支（ずだし）」(dhuta-anga)と呼ぶに対し、大乗仏典の多くは「頭陀功徳（ずだくどく）」(dhuta-guna)と称する。gunaには「功徳」のほかに「徳目」「項目」という意味があるから、ここではdhuta-ngaとdhutagunaを同義と見る。パーリ系では十三支、大乗系では一支少ない十二支をたてる

のが一般的である。

3 禅師が採用した頭陀支

「行持」の巻（㈠三〇一―三〇三）に、『大比丘三千威儀経』が掲げる十二頭陀支が引用される。長文であるが煩をいとわず紹介しよう。

第八祖摩訶迦葉尊者は釈尊の嫡嗣なり。生前もはら十二頭陀を行持して、さらにおこたらず。十二頭陀といふは、

一者不受人請、日行乞食。亦不受比丘僧一飯食分銭財（一つには人の請を受けず、日に乞食を行ず。亦比丘僧の一飯食分の銭財を受けず）。

二者止宿山上、不レ宿人舎郡県聚落（二つには山上に止宿して、人舎郡県聚落に宿せず）。

三者不得従人乞衣被、人与衣被亦不レ受。但取丘塚間、死人所棄衣、補治衣之（三つには人に従つて衣被を乞ふことを得ず、人の与ふる衣被も亦受けず。但丘塚の間の、死人の棄つる所の衣を取つて、補治して之を衣る）。

四者止宿野田中樹下（四つには野田の中の樹下に止宿す）。

五者一日一食。一名僧迦僧泥（五つには一日に一食す。一は僧迦僧泥と名づく）。

六者昼夜不臥、但坐睡経行。一名僧泥沙者偏（六つには昼夜不臥なり、但坐睡経行す。一は僧泥沙者偏と名づく）。

七者有三領衣、無レ有余衣。亦不臥被中（七つには三領衣を有ちて、余衣を有すること無し。亦被中に臥せず）。

八者在塚間、不在仏寺中、亦不在人間。目視死人骸骨、坐禅求道（八つには塚間に在んで、仏寺の中に在まず、亦人間に在まず。目に死人骸骨を視て、坐禅求道す）。

九者但欲独処。不欲見人、亦不欲与人共臥（九つには但独処を欲ふ。人を見んと欲はず、亦人と共に臥せんと欲はず）。

十者先食、果子蓏、却食飯。食已不得復食果蓏（十には先に果蓏を食し、却りて飯を食す。食し已りて復果蓏を食すること得ず）。

十一者但欲露臥、不在樹下屋宿（十一には但露臥を欲ふ、樹下屋宿に在まず）。

十二者不食肉、亦不食醍醐。麻油不塗身（十二には肉を食せず、亦醍醐を食せず。麻油身に塗らず）。

これを十二頭陀といふ。摩訶迦葉尊者、よく一生に不退不転なり。如来の正法眼蔵を正伝すといへども、この頭陀を退することなし。

一は常乞食、二は阿蘭若、三は糞掃衣、四は樹下住、五は一坐食、六は常坐不臥、七は但三衣、八は塚間住、九は随得敷具、十は時後不食、十一は露地住に相当する。最後の十二の「不食肉・不食醍醐・麻油不塗身」はふつう頭陀支の一つとしてたてないものである。ただし、パーリ『ヴィナヤ』に見るデーヴァダッタの五事の第五支の「生涯魚・肉を食べるべからず」（Vin. iii.171）に対応するであろう。

『大比丘三千威儀経』の十二支は、第十二支のみならず、各支の文面および列挙順序はユニークである。あえていえば『十住毘婆沙論』の十二支に近い。本経の第十二支のかわりに、『十住毘婆沙論』の第八支に「持毳衣」が挙げられる。（毳衣とは鳥・獣の細毛で作った衣。「袈裟功徳」の巻。㈣一五一）

さて、禅師が頭陀支を『阿含経』や『般若経』『大智度論』などから引かず、なぜ『大比丘三千威儀経』の十二支を引用したのであろうか？禅師は本経を「洗浄」の巻に二回、「洗面」の巻

に五回、つごう七回も引用している。永平寺教団の修行僧を指導するにあたって、比丘の日常の威儀や心得を詳述した本経のほうが他の律典よりふさわしいと判断したのであろうか。あるいは、出家至上を説く禅師は「大比丘」の三文字に強く心ひかれたのであろうか。

4 糞掃衣と袈裟崇拝

ごみためや路地などに無価値なものとして捨てられたボロ切れをひろいあつめて、その弱い部分を切り捨て、強い部分を取ってよく洗い、それらを綴った一枚の方形の衣は「糞掃衣」と呼ばれる。原語の「パンスクーラ」(pāṃsukūla)には、①汚物の集積の如きもの、と②汚物の如く厭悪されるものという二義がある。汚物の如きものであるから、それにだれも執着しないし、所有権を主張することはない。この糞掃衣の着用は、比丘にとって四依(しえ)の一つであり、頭陀支の一つでもある。禅師は、衣を作る時の材料(衣財)として糞掃衣が最上であるという。「袈裟功徳」の巻に「諸仏の常法、かならず糞掃衣を上品とす」(四一三二)、「いわゆる糞掃衣を最上清浄とす。三世の諸仏、ともにこれ清浄としまします」(四一五七)、「その最第一清浄の衣財は、これ糞掃衣なり。その功徳、あまねく大乗小乗の経律論のなかにあきらかなり」(四一六八)などと見え、糞掃衣を衣財とする袈裟が最上清浄であるという。

法蔵部所伝の『四分律』、化地部の『五分律』はともに十種糞掃を説く。有部の『十誦律』は四種を、パーリの『ヴィナヤ・パリヴァーラ』は五種を二通りあげ、最も増広した『清浄道論』は二十三種をたてる。「袈裟功徳」の巻では、『四分律』と同じ十種が説かれる。「牛嚼衣・鼠嚙衣・火焼衣・月水衣・産婦衣・神廟衣・塚間衣・求願衣・王職衣・往還衣」の十種である(四一七

〇―一七一)。また、前三に死人衣を加えて四種糞掃も説く(㈣一三二)。

さて、「塔袈裟の偈」に至って禅師の袈裟に対する態度は、袈裟信仰から袈裟崇拝に結晶する(㈣一六〇・一七三)。

大哉解脱服　無相福田衣
披奉如来教　広度諸衆生

ちなみに、第三句を道宣の『四分律行事鈔』や道世の『諸経要集』は「披奉如戒行」とする。日本の浄土宗の「袈裟被着偈」の第三句も「披奉如戒行」である。学者は、禅師がわざと文句を変えたのであろうか、伝写の間に変ったものであろうか、という。

5　常坐不臥と只管打坐

常坐不臥は、パーリ十三頭陀支のうちの第十三支に配される支分である。ブッダゴーサはこれを精進支と見るが、住支に含める場合もある。

さて、常坐不臥の支分は、常に坐禅をしていて、夜になっても横臥しない頭陀支である。「袈裟功徳」の巻に引用した十二支のうちの第六「昼夜不臥、但坐睡経行、一名僧泥沙者偏」が相当する。ちなみに「僧泥沙者偏」は、第五の「僧迦僧泥」とともに原語の決定をいまだ見ない。

禅師は、第四支樹下住と第十一支露地住を古風な行履として高唱する。例えば、「古往の聖人、おほく樹下露地に経行す」(行持上、㈠三二一)、「露地樹下の風、とほくきこゆ」(行持下、㈠三七七)、「樹下露地に修習するとき起屋なし」(洗浄、㈢一九一)。

パーリ十三支のうち、阿蘭若住・樹下住・露地住・塚間住はそれぞれの場で禅定(瞑想)をなしつつ諸法の真実の姿を観察する支分である。常坐不臥は禅定の実修そのものである。また、衣の二支と食の五支は禅定に入るための準備的なものといえよう。禅師は「坐禅儀」の巻に「飲

食を節量すべし」(㈠二二三) といい、「坐禅のとき袈裟をかくべし、蒲団をしくべし」(同) と見える。

さて、禅師は「坐禅儀」の巻の冒頭に「参禅は坐禅なり」(㈠二二二) と説く。参禅は公案を用いることではなく、ただひたすら坐禅すること、すなわち「只管打坐」すべきであると主唱した。この只管打坐は、頭陀支の常坐不臥、天台の四種三昧の常行三昧と重なる部分であろう。今後の課題としたい。

6 おわりに

頭陀が説く衣食住の生活は、きわめて簡素なものであり、物を大切にし、物をリサイクルして用いるという精神をくみとることができる。そして、その精神は、ある意味では、物の消費(浪費) をややもすれば美徳と見なしがちな今日のわれわれに大いなる警鐘を鳴らしている。

道元禅師は「仏道はすべからく貧なるべし」といわれた。じじつ、原始曹洞宗教団は経済的には貧しく、社会的認知も弱いものがあったが、禅師は釈尊ブッダの正法を伝えることに燃えていた。禅師は、ブッダおよび摩訶迦葉が重視した頭陀を宣揚することによって、原始仏教教団の厳格性に回帰することを説かれた。

鎌倉新仏教の祖師がたのなかで、ブッダの厳格主義に帰れと主張したのは、道元禅師と一遍上人であると筆者は考えるが、とくに頭陀を重視しつつ瞑想(坐禅) からさとりへと主張したのは、道元禅師ひとりと考える。

〔本稿は『大乗禅』No.906、二〇〇〇年六月号に発表した論稿を改題・補正し、加筆したものであることをおことわりしたい〕

(黙仙寺住職・横浜善光寺育英会参与)